



特別寄稿

## 私の国際化

金子紀夫

会社に入って9年目の1978年の2月、初の海外出張の機会を得ました。成田の開港直前で、羽田空港出発です。行先はロサンゼルス経由オハイオ州のクリーブランドでした。

この機会に至るまでの経緯をお話します。

入社時には英語の読み書きは何とかできましたが、会話は全くダメでした。分光分析という輸出も多い装置の開発部門に配属されました。毎年秋になると、米国人のセールスマンが工場に来て、翌年の展示製品の打合せです。その時、私の開発したある装置が彼の目に止まってしまいました。公害分析の精度を飛躍的に上げる、画期的な装置でした。英語会話の出来ない私は、仮病を使って打合せから逃げ、上長が説明しましたが、セールスマンはそれを見抜き「金子を展示会に出張させなければ販売から手を引く」との事になり、上長は渋々了解しました。しかし、もっと渋ったのは当の私でした。

いよいよ饑別まで貰って独りで出発、ビジネスクラスでしたが、要領を得ずリクライニング・シートを離陸中に倒し、乗客や乗務員からひんしゅくを買い冷や汗。ウイスキー、オレンジジュースなど発音がダメで通じなく、身振り手振りで何とか...しかもアルコール類は有料なのに小銭無し、機内で換金して貰う有様でした。

ロサンゼルスで入国しましたが、一緒に運んだ段ボール箱が没収されてしまいました。「カルネ」という免税になる特殊な手続きを踏んでいましたが、中身の装置をうまく説明できず、挙げ句の果てには、当時世界中を震撼させていた全学連の「特殊機器」と誤解されたのです。いやはや、何のために米国に来たのか。乗り継ぎ待合室でトイレへ...まあ便器の大きいこと、何とか用を達したら今度はドアの前で「チップを出せ」と怒鳴られて大きなお金を...。クリーブランドに着いたのは、大雪で遅れ深夜になりました。例のセールスマン氏の顔を見たときには、もはや泣きべその状態でした。肝心な荷物は無く、腹ペこでフラフラ、何とかホテルへ着きましたが、

またそこでトラブルが有るとは予想もしていませんでした。

チェックインの時サインをしたら、パスポートを見せろと言われました。そうしたら「サインが違う」と言うのです。何遍もやりましたがダメ。実は県庁でパスポートを貰うとき格好を付けて「崩しローマ字」で登録したのです。パニック状態で、全く慣れていない文字を使い、もう滅茶苦茶です。クレジットカードも無く、日本の運転免許証を見せたら笑われ、最後はセールスマン氏が保証人となって解決。彼とバーで飲んだ「JBスコッチ&ソーダ」の味は今でも忘れていません。出発日がちょうど息子の一歳の誕生日、そこでもう一度お祝いをして貰い、時差を肌で感じました。荷物はプロの手により何とかありました

翌朝、レストランで注文の仕方が解らず、何でもイエスと言ってまた大変。食べきれない程の量、がむしゃらに食べてあとでお腹を壊してしまい、持参した胃腸薬が役に立ちました。5日ほど滞在しましたが、部屋の扉のオートロックを知らない悲しさで、ほぼ裸同然で係を呼んだり、またお風呂では非常用のチェーンを引っ張ってレスキュー隊が来たり、トラブルの連続でした。

その後、カリフォルニアに移り、仕事の打合せ。その時には大分度胸も着いてきました。週末にネバダとの州境、夕水湖に近い彼の別荘へ行きました。ご夫婦が近所のパーティへ行き、お爺さんと子犬のピース君と留守番しましたが、訛がすごくまたまた、身振り手振りです。ピース君に「お座り」、「お手」と言っても通じませんでした。当たり前ですね。不思議なもので、サンフランシスコから帰国するときには会話が大分違者になっていました。

それ以来、英会話塾に20数年間通っています。古い本で絶版になりましたが、サトウサンペイ著「スマートな日本人」は私のバイブルです。予習は肝心ですが体験はもっと肝心です。